

税からうまれる笑顔

静岡大学教育学部附属静岡中学校3年 齋藤 一翔

僕が「税」という言葉を聞いた時、身近なようで深く考えてこなかったものだった。増税、関税、国税、確かによく聞く言葉だらけだが、聞くだけでどのようなものなのかを考えたこともなかった。

そこで、自分の身近な税を探してみた。最初に思いついたのは、学校の教科書だった。始業式や入学式でもらう教科書。すべて税金で賄われている。他にも、僕はよく塾に行く前にコンビニを利用する。グミやおにぎりやお茶などを買うときに、毎回支払っている消費税が一番身近なのかもしれない。母と話をした時に、毎月の給料の中から住民税が所得税を納めているけれど、買い物一回ごとの消費税は少なくても、一生で考えると一番多く払うことになるのが消費税だと教えてもらった。僕は税金を納めていないものだと思っていたが、毎日のように納めていたことがわかった。

ところで、そんな毎日納めている税金は何に使われていて、誰のためになっているのだろうか。

ある日、僕と母で近所のこども食堂へ行った。そこは以前、英語を教わっていた先生が営む子ども食堂だった。中に入るとたくさんの人が利用していた。お父さんが三人の子どもを連れてきていたり、子どもたちだけできていたり、奥の方ではみんなのために汗をかきながら料理を作っている人が何人もいた。利用している人は、ひとり親の子たち、共働きで昼だけを食べにくる子もいる。

また、母からは貧困を支えていたり、子供たちの心の居場所としての役割をしたりしていると聞いた。初めて利用したが、確かに地元の人たちの居場所であり、次から次へとたくさんの人が利用していて驚いた。

調べてみると、こども食堂を運営するときに助成金という補助をしてくれるお金とボランティア、フードバンク、直接の食べ物の寄付から成り立っているとわかった。この補助されるお金が税金なのだ。

このように、自分たちが払っていた消費税というのは、知らないところでとても大切なことに使われていることがわかった。

そして、自分たちが食べている食べ物や教科書など身近にあるものは、当たり前ではなく、家に帰れば当たり前のようにある環境も当たり前ではないのだと感じた。

これからは買い物をする時、心のどこかで誰かの役にたっているかもしれないと思う。日常を過ごす中で、日々感謝しながら生活をしていきたいと思った。みんなが少しでも平等に温かいご飯が食べられるようになり、居場所が増えることを僕は願う。

一回に納めるものはわずかでも、積み重なれば、誰かを笑顔にできるかもしれない。